

第7章 弥生時代以降の遺物

第1節 出土遺物の概要

轟貝塚は縄文時代から中世までの複合遺跡であり、これまでの調査で弥生時代以降の土器・陶磁器も比較的多く出土している。主なものとして、弥生時代では中・後期の甕、壺、高坏などの弥生土器、舶載鏡とみられる平縁の鏡式不明鏡が表面採集されている。続く古墳時代の遺物として、埴輪や須恵器が出土しており、貝塚周辺に古墳が存在していたことがわかる。古代の須恵器、中世の土師質土器や瓦質土器、青磁なども出土しており、Aトレンチでは中世居館に伴うとみられる横堀跡が検出されている。このように、縄文時代以降、本貝塚周辺では人々の営みが連綿と続いていたことがうかがわれる。

承久3年(1211)時点では蓮華王院領宇土庄が存在したことが明らかになっており、轟貝塚が所在する宮庄町周辺がその中心とされている。轟貝塚から出土する中世の遺物は、これに関連するものも含まれるのであろう。以下ではA～Dトレンチから出土した弥生時代以降の出土遺物について報告する。

第2節 A～Dトレンチ出土遺物

(1) 表土層及び攪乱層(A～Dトレンチ基本層序Ⅰ層)出土遺物

589・590は弥生中期の甕の口縁部片で、589の端部は断面Tの字形を呈し、590は外側に突帯状に突出する。591は円筒埴輪片。一次調整タテハケのみで、上面を欠損する突帯が残る。

592～597は中世の土器・陶磁器である。592・593は土師質土器で、前者は皿、後者は坏である。回転台を用いて製作しており、内外面とも回転ナデ調整を施す。底部に糸切り離しの痕跡が残る。594～596は瓦質土器で、594は捏鉢、595は羽釜、596は擂鉢である。594の内面は細かい不定方向の擂目状のハケメを施す。596はナデ調整後、擂目を施す。597は16世紀代の龍泉窯系の青磁碗で細蓮弁文を施す。

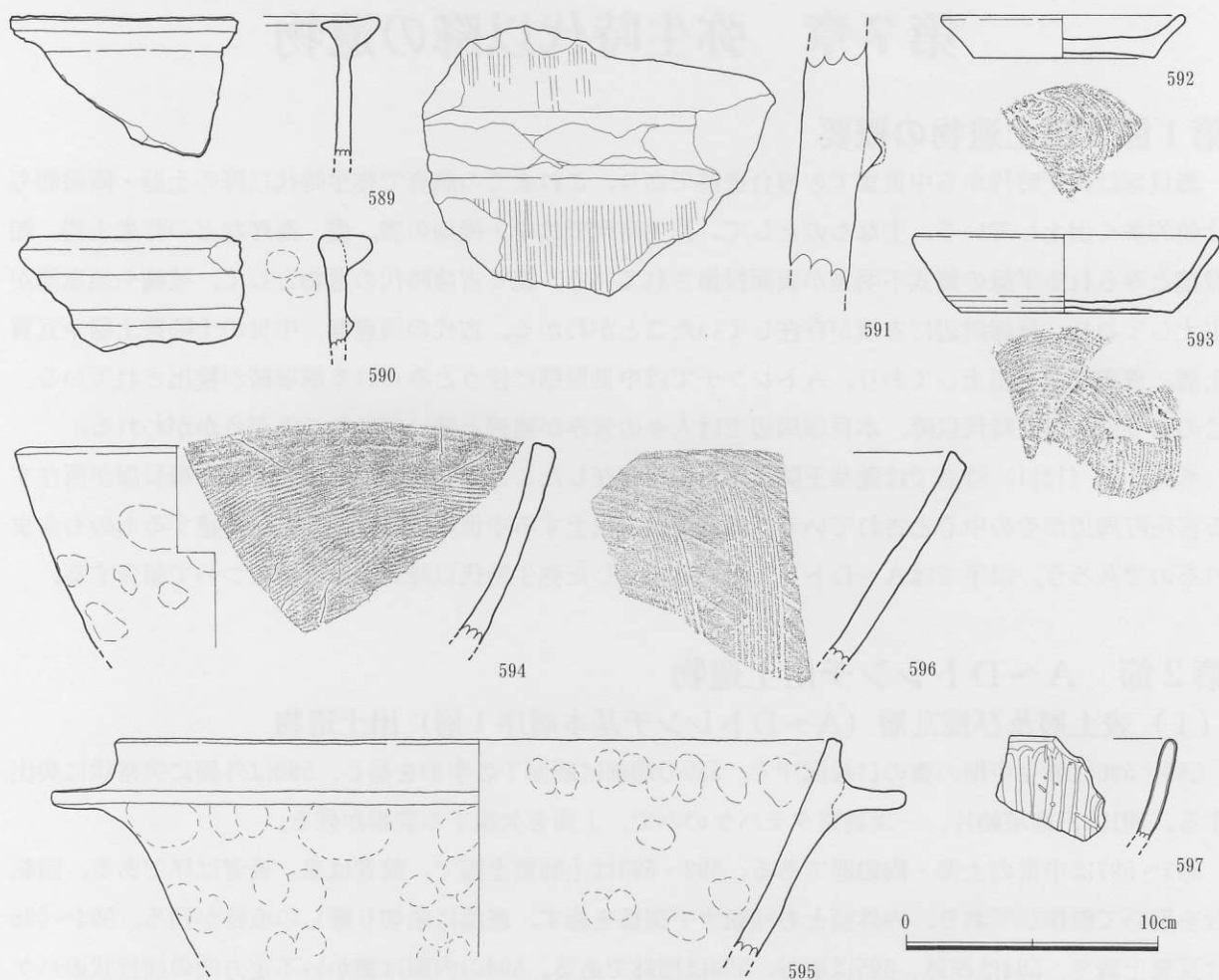
(2) 黒・褐色混土貝層及び混貝土層(A～Dトレンチ基本層序Ⅱ層)出土遺物

598は弥生中期の甕の脚台片で、底面は上げ底状をなす。599は円筒埴輪で口縁部と底部を欠く。内外面とも一次調整タテハケのみであるが、外面の方がハケメの密度が細かい。突帯は高く突出し、断面が台形状を呈する。黒斑がないことから窖窯焼成と判断される。

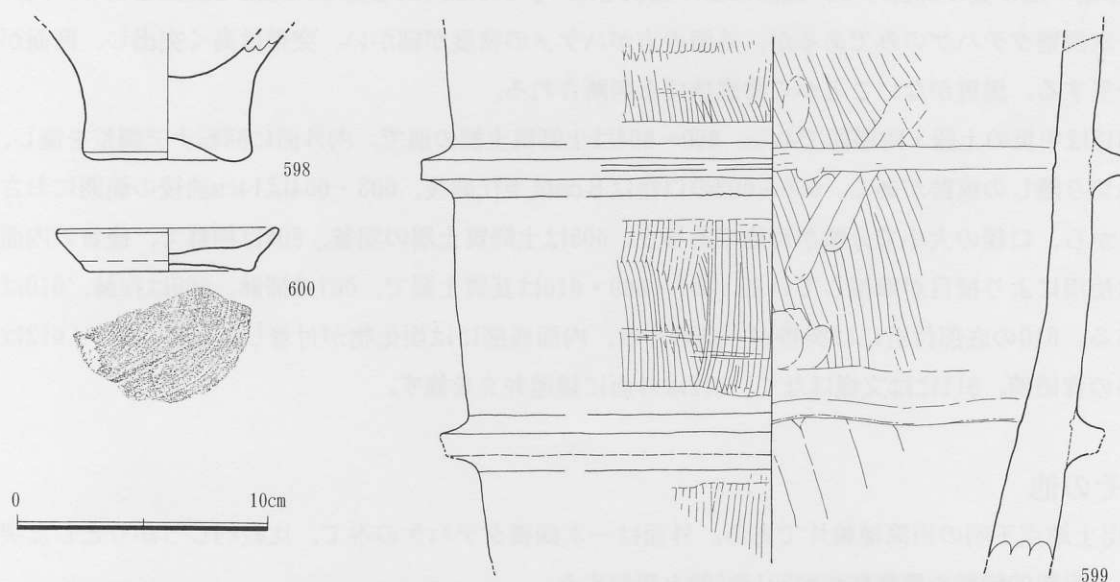
600～612は中世の土器・陶磁器である。600～604は土師質土器の皿で、内外面に回転ナデ調整を施し、底部は糸切り離しの痕跡がある。600～602の口径は8cm後半代前後、603・604は14cm前後の範囲におさまることから、口径の大小で分類が可能であろう。605は土師質土器の羽釜、608は擂鉢で、後者の内面底部には使用により擂目が摩滅している。607・609・610は瓦質土器で、607は擂鉢、609は捏鉢、610は火鉢である。610の底部付近には突帯が一条めぐり、内面底部には炭化物が付着している。611・612は龍泉窯系の青磁碗。611には文様はなく、612は外面に鎬蓮弁文を施す。

(3) その他

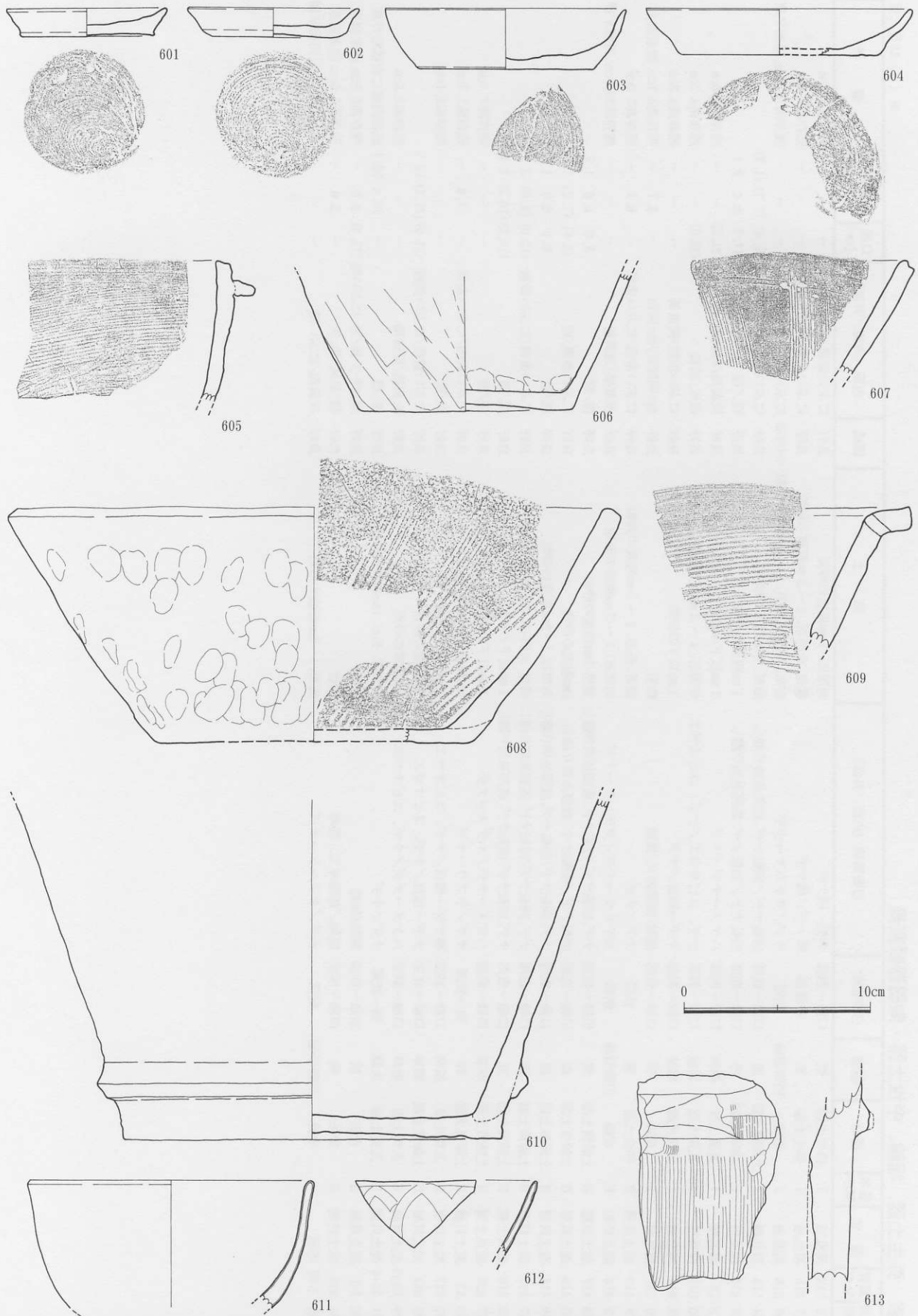
613は出土地点不明の円筒埴輪片である。外面は一次調整タテハケのみで、比較的しっかりとした突帯がつく。形態的特徴や調整技法が591や599と類似する。



第85図 表土層及び攪乱層(A～Dトレンチ基本層序Ⅰ層)出土弥生土器、埴輪、中世土器・陶磁器(1/3)



第86図 黒・褐色混土貝層及び混貝土層(A～Dトレンチ基本層序Ⅱ層)出土弥生土器、埴輪、中世土器・陶磁器(1/3)



第87図 黒・褐色混土貝層及び混貝土層(A～Dトレンチ基本層序Ⅱ層)出土弥生土器、埴輪、中世土器・陶磁器及び出土地点不明埴輪(1/3)

第18表 弥生土器・埴輪、中世土器・陶磁器観察表

※ () は復元値

採掘 番号	実測 番号	調査 地点	層位	基本 層序	種類	器種	残存部位	器面調整 (内面/外面)	胎土	焼成	色調 (内面/外面)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
589	576	C13	攪乱層	I	弥生土器	甕	口縁~胴部	ナデ/横ナデ	角閃石、1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙/灰黄褐	—	—	—	残存高5.5cm
590	607	B15	攪乱層	I	弥生土器	甕	口縁部	横ナデ/横ナデ	雲母、角閃石、1~3mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙/にぶい黄橙	—	—	—	残存高4.6cm
591	609	D18	攪乱層	I	埴輪	円筒埴輪	胴部	ナデ/タテハケ→ナデ	雲母、角閃石、長石、1~3mm程度の砂粒	やや不良	にぶい橙/にぶい橙	—	—	—	残存高10.8cm、川西V期
592	584	A16	攪乱層	I	土師質土器	皿	口縁~底部	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	雲母、1mm以下の砂粒	良好	にぶい褐/にぶい褐	(9.6)	(7.2)	(1.7)	
593	586	A16	攪乱層	I	土師質土器	坏	口縁~底部	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	1mm程度の砂粒	良好	橙/橙	11.8	8.4	3.1	
594	578	C5	攪乱層	I	瓦質土器	捏鉢	口縁~胴部	ハケメ→ナデ/ナデ	1mm以下の砂粒	良好	灰黄褐/灰黄褐	(21.5)	—	—	残存高8.0cm
595	596	D18	攪乱層	I	瓦質土器	羽釜	口縁~胴部	ナデ、ユビオサエ/ナデ、ユビオサエ	角閃石、1~2mm程度の砂粒	良好	黄灰/灰黄	(29.0)	—	—	残存高8.2cm
596	598	D18	攪乱層	I	瓦質土器	擂鉢	口縁~胴部	ナデ→擂目/ナデ	1mm以下の砂粒	良好	にぶい黄橙/灰黄褐	—	—	—	残存高8.3cm
597	580	C3	攪乱層	I	青磁	碗	口縁~体部	施釉/細蓮弁文、施釉	緻密	良好	釉:明緑灰/胎:灰白	—	3.7	—	残存高3.7cm、龍泉窯系
598	579	A19	混土貝層	II	弥生土器	甕	底部	ナデ/ナデ	雲母、長石、1~2mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙/にぶい黄橙	—	6.7	—	残存高5.0cm
599	610	A18	混土貝層	II	埴輪	円筒埴輪	胴部	タテハケ→ナデ/タテハケ→ナデ	角閃石、1~3mm程度の砂粒	良好	浅黄橙/浅黄橙	—	—	—	残存高20.8cm、川西V期
600	589	A17	混土貝層	II	土師質土器	皿	口縁~底部	ナデ、回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	雲母、1mm程度の砂粒	良好	橙/橙	8.6	6.6	1.7	
601	585	A18	混土貝層	II	土師質土器	皿	口縁~底部	回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	1mm程度の砂粒	良好	にぶい赤褐/橙	(8.6)	(7.2)	1.5	
602	590	A18	混土貝層	II	土師質土器	皿	口縁~底部	ナデ、回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	角閃石、1~2mm程度の砂粒	良好	橙/橙	9.0	6.8	1.6	
603	587	A11	混土貝層	II	土師質土器	皿	口縁~底部	ナデ、回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	雲母、角閃石、1mm以下の砂粒	良好	にぶい黄橙/にぶい黄橙	(13.0)	(9.6)	3.3	
604	588	A10	混土貝層	II	土師質土器	皿	口縁~底部	ナデ、回転ナデ/回転ナデ、底部糸切り離し	1mm以下の砂粒	良好	橙/橙	(14.2)	(10.5)	2.5	
605	577	A20	混土貝層	II	土師質土器	羽釜	口縁~胴部	ハケメ→ナデ/ハケメ→ナデ	1mm以下の砂粒	良好	橙/橙	—	—	—	残存高7.4cm
606	583	A3	混土貝層	II	土師質土器	鉢	胴~底部	ナデ/ケズリ→ナデ	1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄褐/にぶい黄褐	—	11.6	—	残存高7.3cm
607	597	A17	混土貝層	II	瓦質土器	擂鉢	口縁~胴部	横ナデ→擂目/ナデ、ユビオサエ	1mm程度の砂粒	良好	灰/灰	—	—	—	残存高6.1cm
608	595	D17	混土貝層	II	土師質土器	擂鉢	口縁~底部	ナデ→擂目/ナデ、ユビオサエ	1mm程度の砂粒	良好	にぶい黄橙/にぶい黄橙	(31.0)	(17.1)	12.5	
609	599	A18-19	混土貝層	II	瓦質土器	捏鉢	口縁~胴部	ハケメ→ナデ/ナデ、ユビオサエ	1mm程度の砂粒	良好	灰黄褐/灰黄褐	—	—	—	残存高7.5cm
610	591	A3-4	混土貝層	II	瓦質土器	火鉢	胴~底部	ナデ/ナデ	角閃石、長石、1mm程度の砂粒	良好	黒/黒	—	20.4	18.1	底部内面に有機物付着
611	582	A3	混土貝層	II	青磁	碗	口縁~体部	施釉/施釉	緻密	良好	釉:初ア黄/胎:にぶい橙	(15.3)	6.8	—	残存高6.8cm、龍泉窯系
612	581	B15	混土貝層	II	青磁	碗	口縁~体部	施釉/鎗蓮弁文、施釉	緻密	良好	釉:緑灰/胎:灰	—	3.6	—	残存高3.6cm、龍泉窯系
613	608	不明	不明	—	埴輪	円筒埴輪	胴部	ナデ/タテハケ→ナデ	雲母、1~3mm程度の砂粒	良好	灰黄褐/にぶい橙	—	—	—	残存高11.1cm、川西V期

第8章 動物遺存体

第1節 出土した動物遺存体の概要

本貝塚の調査では、堆積土各層で貝類遺体や脊椎動物遺体が出土した。特にEトレンチの混土貝層や純貝層では数多くの脊椎動物遺体が出土している。また、AトレンチからDトレンチにかけての貝層下の褐色土層や黒色土層でも比較的多くの動物遺体が確認された。

本調査では貝層のブロックサンプリングや水洗選別は行われておらず、発掘時に取り上げられた現地採集資料である。以下では貝類遺体と脊椎動物遺体に分けてその同定結果を中心に報告する。なお、前者については菊池泰二氏にご協力いただき、所見をまとめていただいた。

第2節 貝類遺体

出土した貝類遺体は二枚貝綱、腹足綱（巻貝）に大きく分類される。貝種については後述の菊池氏報告を参照されたい。

第3節 脊椎動物遺体

（1）出土した脊椎動物遺体の概要

出土した脊椎遺体種は魚骨、獣骨、哺乳類である。分析資料100点のうち2点にヒトの遊離歯及び下顎骨が含まれている。本来は別項を設けて報告すべきであろうが、分析の結果判明したものであり、第19表ではそのまま掲載した。また、A～Dトレンチにおいて甕式土器が数多く出土した褐色土層やその上層の阿高式土器を包含する縄文中期に形成されたとみられる純貝層、Eトレンチの純貝層など層位的にみて重要な土層から出土した脊椎動物遺体について優先的に同定を行った。また、純貝層の上層である混土貝層から出土したものの残存度合いが高いものを中心に同定作業を実施した。

（2）脊椎動物遺体の種類と特徴について

①魚類 a 軟骨魚綱

サメ類 (*Lamna* sp)

アカエイ科/トビエイ科 (*Dasystididae/Myliobatididae*)

b 硬骨魚綱

フグ科 (*Tereodontidae*)

ハタ科 (*Serranidae*)

マダイ (*Pagrus major*)

クロダイ属 (*Acanthopagrus*)

スズキ (*Lateolabrax japonicus*)

②鳥類 タカ科 (*Falconiformes*)

③哺乳類 イルカ類 (*Delphinidae*)

クジラ類 (*Cetacea*)

イヌ (*Canis familiaris*)

ニホンジカ (*Cervus nippon*)

イノシシ (*Sus scrofa*)

クロダイ属、スズキは汽水域にも進入することから、内湾を代表する魚種である。フグ科も内湾でよく見られる。一方、ハタ科やマダイは沿岸の中層から低層、岩礁域に生息している。アカエイ科あるいはトビエイ科の尾棘は毒を分泌する。

イノシシとニホンジカでは遊離歯および鹿角を除いて、破片数、最少個体数ともにイノシシの方が多く出土している。イノシシ、ニホンジカの両方とも頭部、中軸骨、四肢骨が出土していることから、解体は遺跡周辺において行われたと考えられる。

鹿角は骨角器に利用したと考えられる。その内のNo. 27は素材を得るために鋭い刃物、石器でも刃部を薄く加工したものを使用して、第一分枝部を幾度も回転しながら利器を叩きつけて、芯部が残ったまま折り取ったと考えられる。

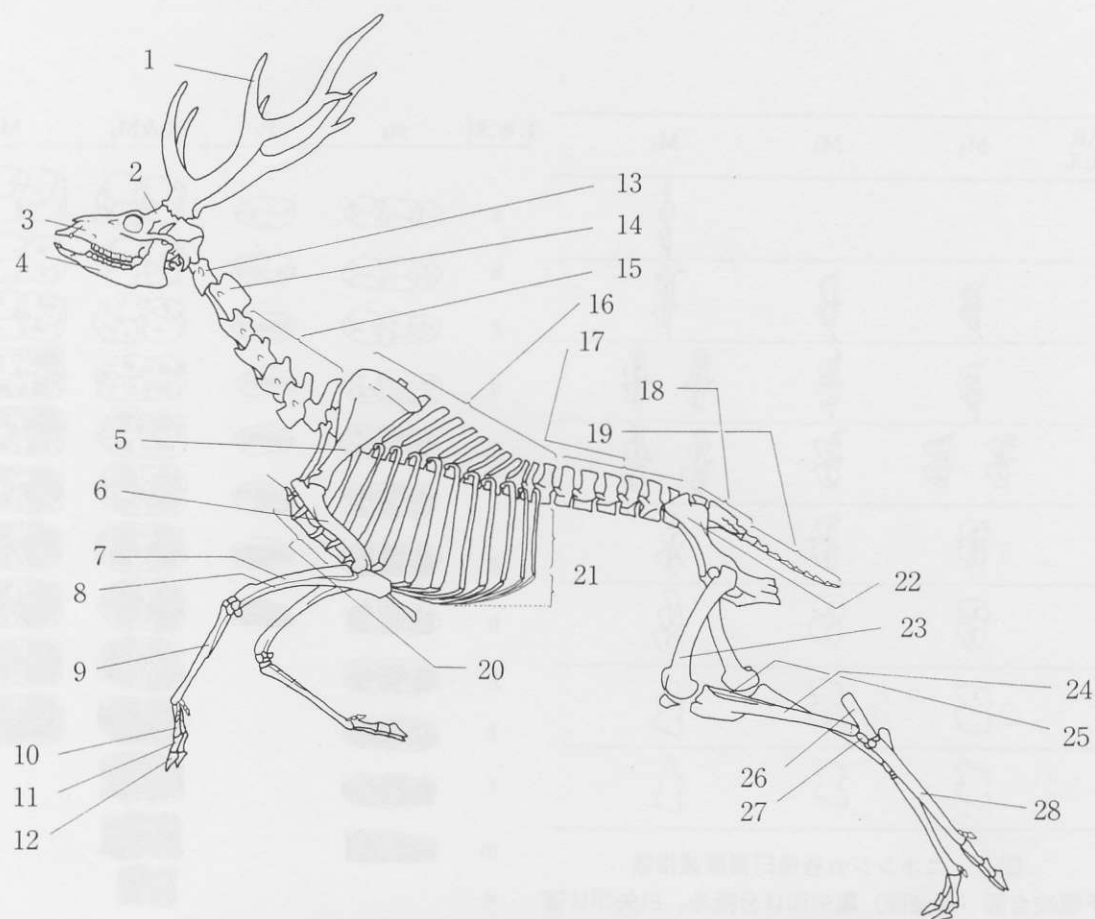


図1 主要な骨格の名称 (図はニホンジカ) (八谷・大泰司1994)

動物種別計測値一覧

単位: mm

名称	計測部位	ニホンジカ	イノシシ	ツキノワグマ	カモシカ
頭蓋骨	頭蓋全長 (GL)	290.3	294.9	257.1	209.7
	頭蓋最大幅 (ZB)	132.7	136.2	170.8	91.3
	下顎骨全長 (Id-Goc)	186.0	241.7	179.2	166.3
下顎骨	下顎枝高 (Cr-Gov)	101.0	106.7	86.9	86.1
	最大長 (HS)	161.5	191.5	132.7	160.8
肩甲骨	遠位端最大幅 (GLP)	39.5	33.9	39.1	35.1
	最大長 (GL)	180.6	196.0	204.5	196.4
上腕骨	近位端最大幅 (Bp)	46.3	50.0	40.0	43.2
	遠位端最大幅 (Bd)	38.5	41.7	55.6	39.4
	滑車幅 (BT)	37.4	29.9	37.1	37.0
	最大長 (GL)	187.0	142.3	179.3	182.2
橈骨	近位端最大幅 (Bp)	35.7	27.6	23.7	37.1
	遠位端最大幅 (Bd)	32.4	32.0	32.0	33.6
	最大長 (GL)	229.6	198.1	209.4	226.4
尺骨	幅 (DPA)	32.6	36.1	26.9	27.5
	最大長 (GL)	186.8	64.1 (63.3)	—	136.6
中手骨	近位端最大幅 (Bp)	25.1	20.2 (15.0)	—	30.6
	遠位端最大幅 (Bd)	27.4	16.4 (15.3)	—	35.2
	最大長 (GL)	217.8	221.7	182.1	216.4
掌骨	寛骨臼最大幅 (LA)	32.4	31.8	31.4	31.6
	最大長 (GL)	223.6	209.9	215.1	219.1
	近位端最大幅 (Bp)	55.0	52.7	53.4	47.3
大腿骨	遠位端最大幅 (Bd)	49.9	45.5	44.9	45.1
	最大長 (GL)	265.3	188.7	178.4	254.8
脛骨	近位端最大幅 (Bp)	50.4	48.3	46.4	49.1
	遠位端最大幅 (Bd)	33.7	27.6	34.4	34.1
	最大長 (GL)	—	174.7	158.7	—
腓骨	最大長 (GL)	214.8	69.6 (76.3)	—	146.8
	近位端最大幅 (Bp)	24.2	14.8 (13.5)	—	25.5
	遠位端最大幅 (Bd)	26.7	15.3 (15.9)	—	32.9
距骨	外側最大幅 (GLI)	35.8	40.2	26.3	36.6
	内側最大幅 (GLm)	34.4	35.3	—	34.7
	遠位端最大幅 (Bd)	23.4	23.8	—	19.4
踵骨	最大長 (GL)	80.8	75.4	45.9	65.6
	最大幅 (GB)	25.4	22.6	31.3	24.1

- | | |
|---------|--------|
| 1 (枝) 角 | 17 腰 椎 |
| 2 頭蓋骨 | 18 仙 椎 |
| 3 上顎骨 | 19 尾 椎 |
| 4 下顎骨 | 20 胸 骨 |
| 5 肩甲骨 | 21 肋 骨 |
| 6 上腕骨 | 22 寛 骨 |
| 7 橈 骨 | 23 大腿骨 |
| 8 尺 骨 | 24 脛 骨 |
| 9 中手骨 | 25 腓 骨 |
| 10 基節骨 | 26 踵 骨 |
| 11 中節骨 | 27 距 骨 |
| 12 末節骨 | |
| 13 環 椎 | |
| 14 軸 椎 | |
| 15 頸 椎 | |
| 16 胸 椎 | |

第88図 骨格の名称 (奈良文化財研究所埋蔵文化財センター2003より転載)

WEAR INDEX	M ₁	M ₂	M ₃
7			
6			
5			
4			
3			
2			
1			
0			

図2 ニホンジカ各後臼歯摩滅指数
右下顎咬合面（摩滅面）黒矢印は分断を、白矢印は連続していることを示す。（大泰司1980）

T.W.S	m ₄	P ₄	M ₁ &M ₂	M ₃
a				
b				
c				
d				
e				
f				
g				
h				
j				
k				
l				
m				
n				

図3 イノシシ下顎歯摩滅指数（Bull and Payne 1982）

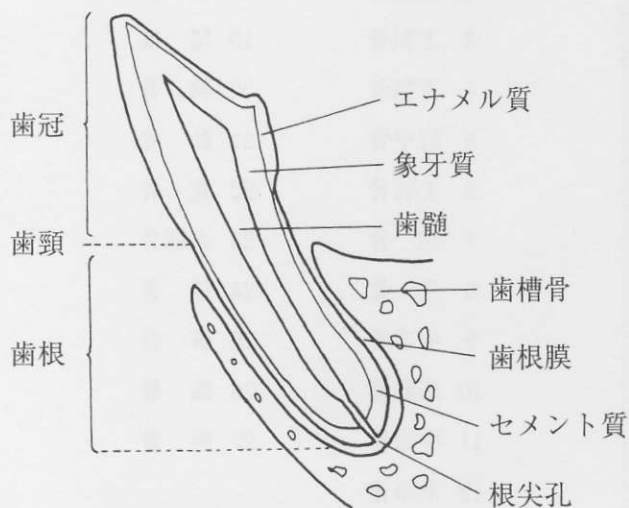


図4 歯の部分名称（図はニホンジカ）
（八谷・大泰司1994）

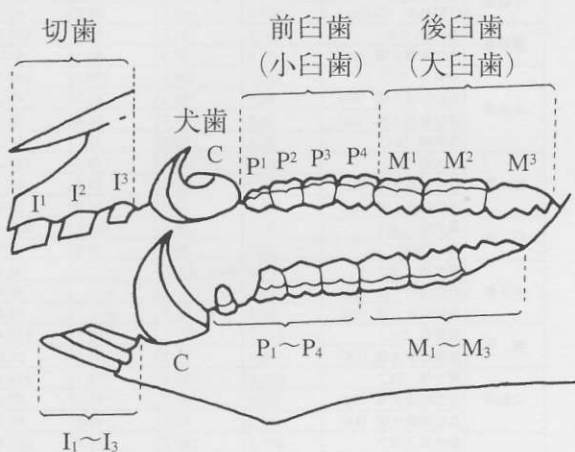


図5 歯の名称と略号（図はイノシシ）
（原図 八谷・大泰司1994）

第89図 ニホンジカ及びイノシシの歯に関する資料（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター2003より転載）

第19表 轟貝塚出土動物遺存体一覧表 1

No.	遺物No.	調査区	遺構	層 位	大分類	小 分 類	部位	部 分	左右	備 考
1	12	DT-18		純貝層	軟骨魚綱	サメ類	椎骨		中	椎体横径20.47
2	98	AT-2		純貝層	軟骨魚綱	サメ類	椎骨		中	椎体横径31.83
3	71	ET-1		混土貝層	軟骨魚綱	アカエイ科/トビエイ科	尾棘		中	
4	95	ET-1		混土貝層	軟骨魚綱	アカエイ科/トビエイ科	尾棘		中	
5	15	DT-20		純貝層	硬骨魚綱	フグ科	歯骨	ほぼ完形	左	体長40cm以上
6	20	DT-1		純貝層	硬骨魚綱	ハタ科	主上顎骨		右	体長30~40cm
7	75	AT-19		黒褐色層	硬骨魚綱	マダイ	歯骨	ほぼ完形	右	歯骨高17.05長54.81・体長60cm以上
8	100	AT-13		混土貝層	硬骨魚綱	マダイ	前上顎骨		左	大きな個体
9	76	AT-12		混土貝層	硬骨魚綱	クロダイ属	前上顎骨	ほぼ完形	左	上部切断?・歯骨長25.61・体長20cm~30cm
10	81	ET-3		混土貝層	硬骨魚綱	クロダイ属	前上顎骨	ほぼ完形	右	骨長33.30
11	82	ET-3		混土貝層	硬骨魚綱	クロダイ属	前上顎骨	ほぼ完形	右	骨長30.95参考値
12	93	AT-13		混土貝層	硬骨魚綱	クロダイ属	鰭棘	第1背鰭棘	中	
13	77	AT-10		混土貝層	硬骨魚綱	スズキ	歯骨	前位部	左	歯骨高10.58
14	78	ET-3		混土貝層	硬骨魚綱	不明	鰭棘	棘条部	—	
15	79	ET-3		混土貝層	硬骨魚綱	不明	鰭棘	棘条部	—	鰭棘?
16	29	DT-22		褐色土層上層	鳥綱	タカ科	鳥口骨		左	タカ類?
17	27	DT-23		褐色土上層	哺乳綱	イヌ	椎骨	軸椎	中	やや小さい?
18	94	AT-13		混土貝層	哺乳綱	イヌ	中手骨	第3中手骨	左	計測(Bd7.34)
19	32	DT-24		褐色土層上部	哺乳綱	ヒト	遊離歯	上顎I2	左	
20	83	AT-3		混土貝層	哺乳綱	ヒト	下顎骨		中	
21	88	BT-2		混土貝層	哺乳綱	イルカ類	椎骨	腰椎	中	unfused(椎体)
22	1	AT-1		混土貝層	哺乳綱	クジラ類	椎骨	椎体	中	割っている?
23	8	AT-1		混土貝層	哺乳綱	クジラ類	椎骨	椎体	中	割っている?
24	9	CT-15		攪乱層	哺乳綱	クジラ類	椎骨	椎体	中	割っている?
25	21	DT-13		純貝層	哺乳綱	クジラ類	不明	破片	—	
26	22	DT-13		純貝層	哺乳綱	クジラ類	不明	破片	—	
27	74	ET-1		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	枝角	角座-第1分枝部	右	小さい・落角・鋭い刃物で何度も叩いて回転切断
28	19	DT-22		貝層	哺乳綱	ニホンジカ	枝角	角座付近	—	
29	85	AT-3		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	頭蓋骨	前頭骨	左	枝角切断
30	56	ET-2		純貝層	哺乳綱	ニホンジカ	頭蓋骨	前頭骨	右	眼窩付近
31	51	ET-3	土壌墓	埋土?	哺乳綱	ニホンジカ	下顎骨	P4-M2歯槽付近	右	計測M2(L16.61B10.94)・咬耗(4)
32	44	ET-3	土壌墓	埋土?	哺乳綱	ニホンジカ	下顎骨	P3-M3下顎体付近	右	計測M3(L25.56B11.81)・咬耗(4)舌側の著しい咬耗
33	87	ET-1		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	椎骨	環椎	中	左側chopmark?計測GB86.72参考値GL68.45)
34	45	ET-3	土壌墓	埋土?	哺乳綱	ニホンジカ	椎骨	頸椎	中	unfused(椎体)・後部破損
35	89	AT-13		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	椎骨	腰椎	中	unfused(椎体)
36	92	AT-13		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	椎骨	腰椎	中	unfused(椎体後方)・fusing(椎体前方)
37	54	ET-3	土壌墓	埋土?	哺乳綱	ニホンジカ	椎骨	腰椎	中	左半分欠損
38	70	ET-1		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	近位部-遠位端	右	計測(GLP41.57SLC24.69)
39	61	ET-2		純貝層	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	骨幹部-遠位端	右	計測(GLP41.17SLC22.95)
40	90	AT-13		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	近位部-遠位端	左	計測(Bd40.89)
41	41	DT-22		褐色土層上層	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	遠位端内側	左	破損
42	60	ET-2		純貝層	哺乳綱	ニホンジカ	尺骨	近位部-骨幹部	左	計測(DPA31.64)
43	84	AT-3		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	中手骨	骨幹部-遠位端	左	計測(Bd28.58)
44	49	ET-3	土壌墓	埋土?	哺乳綱	ニホンジカ	寛骨	寛骨臼-座骨	左	恥骨、腸骨破損
45	23	DT-18		混貝褐色土	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	骨幹部-遠位部	左	
46	50	ET-3	土壌墓	埋土?	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	遠位端	右	unfused
47	47	ET-3	土壌墓	埋土	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	近位部-遠位部	右	イヌ咬痕
48	73	ET-3		混土貝層(II)	哺乳綱	ニホンジカ	踵骨	ほぼ完形	左	計測(GL99.85GB31.28)
49	72	ET-1		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	距骨	ほぼ完形	右	cutmark(med)4・計測(GL140.05GLm37.06Bd24.42)
50	42	DT-18		褐色土層上部XIII	哺乳綱	ニホンジカ	距骨	ほぼ完形	左	計測(GL142.12GLm38.76Bd25.30)
51	91	AT-13		混土貝層	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	骨幹部-遠位端	右	計測(Bd30.60)
52	55	ET-2		純貝層	哺乳綱	イノシシ	上顎骨	M2M3上顎体付近	右	計測M3(L31.66B18.47)・咬耗(d)
53	46	ET-3	土壌墓	埋土?	哺乳綱	イノシシ	上顎骨	M3上顎体付近	右	計測(L30.90B18.66)・咬耗(d~e)・歯石あり?
54	18	DT-22		貝層	哺乳綱	イノシシ	上顎骨	M2M3上顎体付近	右	計測M3(L30.26B18.43)・咬耗(d~e)
55	57	ET-2		純貝層	哺乳綱	イノシシ	上顎骨	M1-M3上顎体付近	左	計測M3(L28.8318.68B)・咬耗(d)
56	53	ET-3	土壌墓	埋土?	哺乳綱	イノシシ	上顎骨	M3上顎体付近	左	計測(L32.75B19.05参考値)・咬耗(d)・歯石あり?
57	11	DT-18		IX層(カキ純貝層)	哺乳綱	イノシシ	下顎骨	結合部	中	♂(犬歯大)
58	34	DT-20		褐色土層下部	哺乳綱	イノシシ	下顎骨	C~M3歯槽付近	右	♀(犬歯小)
59	36	DT-20		褐色土層下部	哺乳綱	イノシシ	下顎骨	M3歯槽付近	右	計測M3(L32.91B14.67)・咬耗(d~e)
60	68	ET-2		混土貝層II	哺乳綱	イノシシ	下顎骨	結合部-M1下顎体付近	右	dP3dP4M1・dP4計測(L17.11B8.55)咬耗(c~d)・♀?

第20表 轟貝塚出土動物遺存体一覧表 2

No.	遺物No.	調査区	遺構	層 位	大分類	小 分 類	部位	部 分	左右	備 考
61	39	DT-20		褐色土層下部	哺乳綱	イノシシ	上顎骨	M1M2歯槽付近	左	計測M2 (L20.35B15.89)・咬耗(c)
62	69	ET-2		混土貝層Ⅱ	哺乳綱	イノシシ	下顎骨	C-M1下顎体付近	左	68と同一? dP3dP4M1-dP4計測(L17.73B8.49)咬耗(c~d)
63	86	AT-3		混土貝層	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	上顎I1	右	咬耗あり
64	24	DT-18		混貝褐色土	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	上顎I1	右	
65	7	AT-8	ビット	埋土	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	上顎I1	左	咬耗あり
66	3	AT-22		褐色土層	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	上顎I2	左	咬耗あり
67	80	ET-3		混土貝層(Ⅱ)	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎I3	右	咬耗あり
68	35	DT-20		褐色土層下部	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎I1	右	咬耗あり
69	33	DT-9		褐色土層下部	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎I2/3	—	破損
70	37	DT-20		褐色土層下部	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎I1	右	先端部破損
71	38	DT-20		褐色土層下部	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎I2	左	咬耗少
72	62	ET-2		純貝層	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎C	左	♀
73	6	AT-22		褐色土層	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	上顎M2	左	計測不可・咬耗(b)
74	2	AT-22		褐色土層	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	上顎M3	左	計測M3 (L32.28B18.83)・咬耗(c)
75	25	DT-24		褐色土層下部	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎M1	左	計測 (L16.09B10.35)・咬耗(f)
76	13	DT-18		純貝層	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎M3	左	計測 (L35.54B16.08)
77	16	DT-20		貝層	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎M3	右	計測 (L32.30B16.36)
78	40	DT-20		褐色土層上部	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎M1	右	計測 (L35.54B14.35)・咬耗(c)
79	43	DT-20		黒色土層	哺乳綱	イノシシ	遊離歯	下顎M3	右	未萌出・計測 (L34.10B16.24)
80	31	DT-22		褐色土層上層	哺乳綱	イノシシ	椎骨	軸椎	中	
81	30	DT-22		褐色土層上層	哺乳綱	イノシシ?	椎骨		中	unfused(椎体)
82	97	DT-1		混土貝層	哺乳綱	イノシシ	仙骨		中	unfused(椎体)
83	96	DT-1		混土貝層	哺乳綱	イノシシ	仙骨		中	unfused(椎体)
84	66	BT-2		混土貝層	哺乳綱	イノシシ	肩甲骨	骨幹部-遠位端	右	計測 (GLP36.46参考値SLC27.44)
85	64	ET-2		純貝層	哺乳綱	イノシシ	肩甲骨	骨幹部-遠位端	右	計測 (GLP36.82SLC25.75)
86	10	DT-18		純貝層	哺乳綱	イノシシ	肩甲骨	遠位部	右	やや小さい?
87	63	ET-2		純貝層	哺乳綱	イノシシ	肩甲骨	骨幹部-遠位端	右	計測 (DPA39.80SD030.55)
88	52	ET-3	土壌墓	埋土?	哺乳綱	イノシシ	尺骨	近位部-骨幹部	右	計測 (DPA39.80SD030.55)
89	28	DT-22		褐色土層上層	哺乳綱	イノシシ	上腕骨	遠位部	右	
90	67	ET-1		混土貝層	哺乳綱	イノシシ	上腕骨	遠位部	右	fusing(dis)・spiral・計測 (Bd44.67)
91	65	ET-2		純貝層	哺乳綱	イノシシ	橈骨	近位部-遠位部	左	咬痕?・計測 (Bd28.87)
92	59	ET-2		純貝層	哺乳綱	イノシシ	中手骨	第2中手骨	右	計測 (GL60.37Bp7.27Bd12.39)
93	48	ET-3	土壌墓	埋土?	哺乳綱	イノシシ	中手骨	第4中手骨	右	計測 (GL83.55Bp19.71Bd18.81)
94	14	DT-20		純貝層	哺乳綱	イノシシ	大腿骨	近位端-骨幹部	左	イヌ咬痕
95	5	AT-22		褐色土層	哺乳綱	イノシシ	脛骨	骨幹部-遠位端	左	計測不可
96	99	AT-14		貝層	哺乳綱	イノシシ	脛骨	骨幹部-遠位端	右	計測 (Bd33.98)
97	4	AT-22		褐色土層	哺乳綱	イノシシ?	脛骨	骨幹部	左	後位面に穿孔あるが、新しい傷?
98	26	DT-23		褐色土上層	哺乳綱	イノシシ	距骨	ほぼ完形	右	計測 (GL141.22GLm38.93)
99	58	DT-20		貝層	哺乳綱	イノシシ	中足骨	第5中足骨	右	計測 (GL60.08)
100	17	ET-2		純貝層	哺乳綱	イノシシ	指骨	中節骨	—	計測 (GL23.90Bp16.36Bd14.99)

計測はDreisch(1976)に準ずる

用語解説

SDO: 尺骨の滑車(上腕骨の遠位端と関節する部分)より近位側で最もくびれて細くなっている部分の最大値を示す。

SLC: 甲骨の遠位端(上腕骨の近位端と関節する部分)の最大幅を示す。

unfused: 骨端部の癒合(成長)状況を表しており癒合中、つまり幼獣を示す。

fusing: 骨端部の癒合(成長)状況を表しており癒合中、幼獣から成獣の段階を示す。

spiral: 螺旋状に割れており、人為的な骨の打ち割りの可能性を示す。

cutmark(med): いわゆるカットマーク(骨の内側に)で解体の可能性を示す。

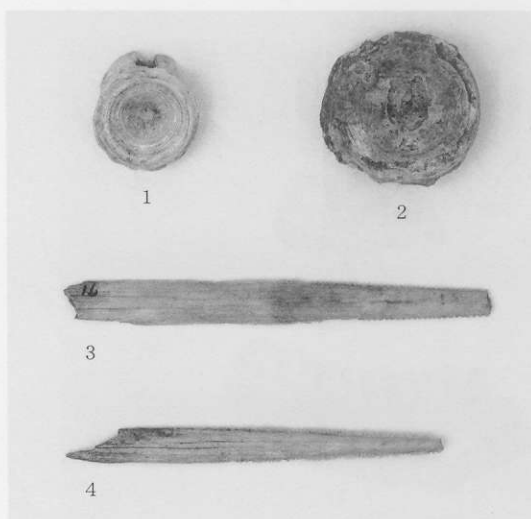
chopmark: カットマークよりも深く、叩き割ったような傷。

dP3やdP4のdは、乳歯を表す。

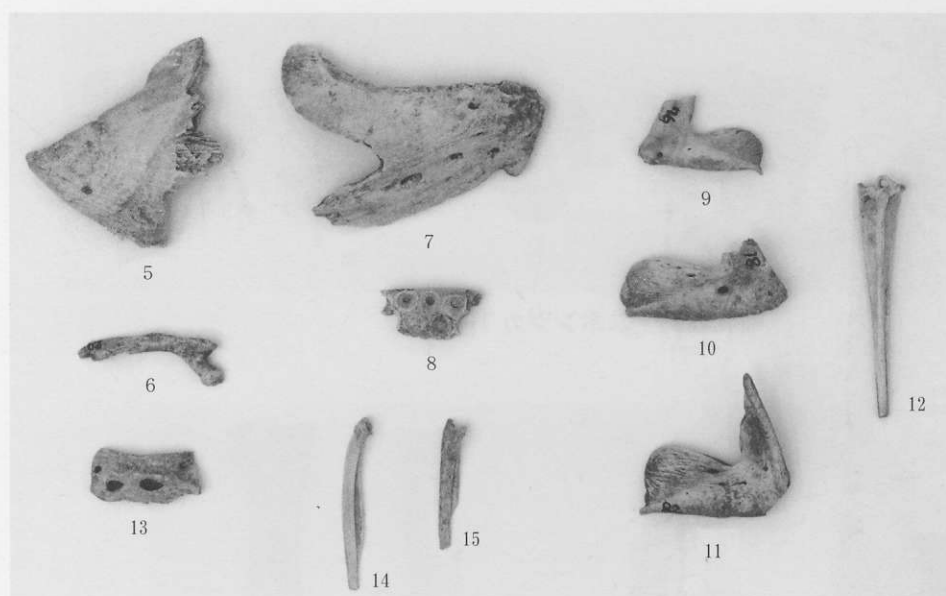
※骨の計測部位については第88図の「主要な骨格の名称」と「動物種別計測値一覧」を参照。また、歯については第89図の「歯の部分名称」や「摩滅指数」の図を参照。

引用・参考文献

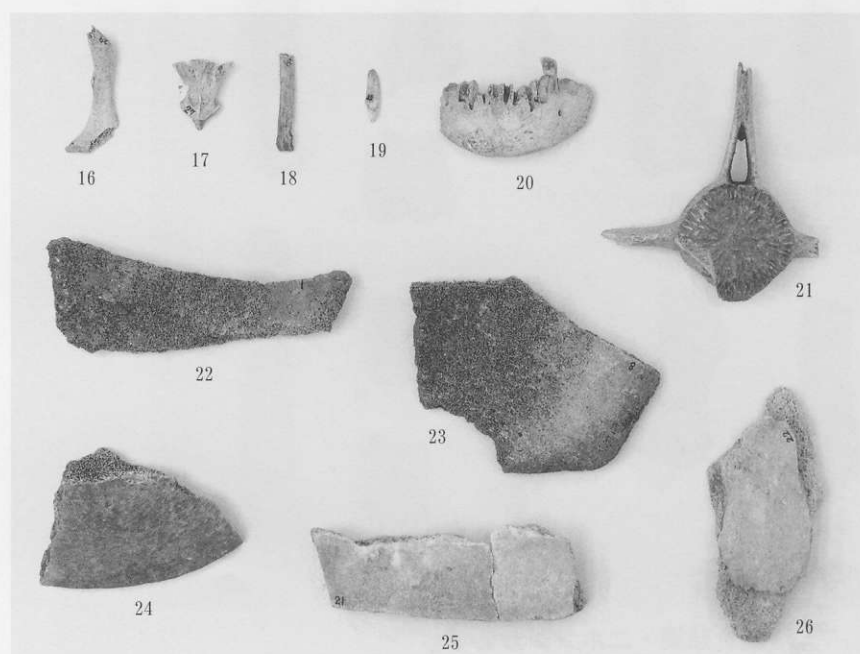
奈良文化財研究所埋蔵文化財センター2003 『埋蔵文化財ニュース』113 奈良文化財研究所



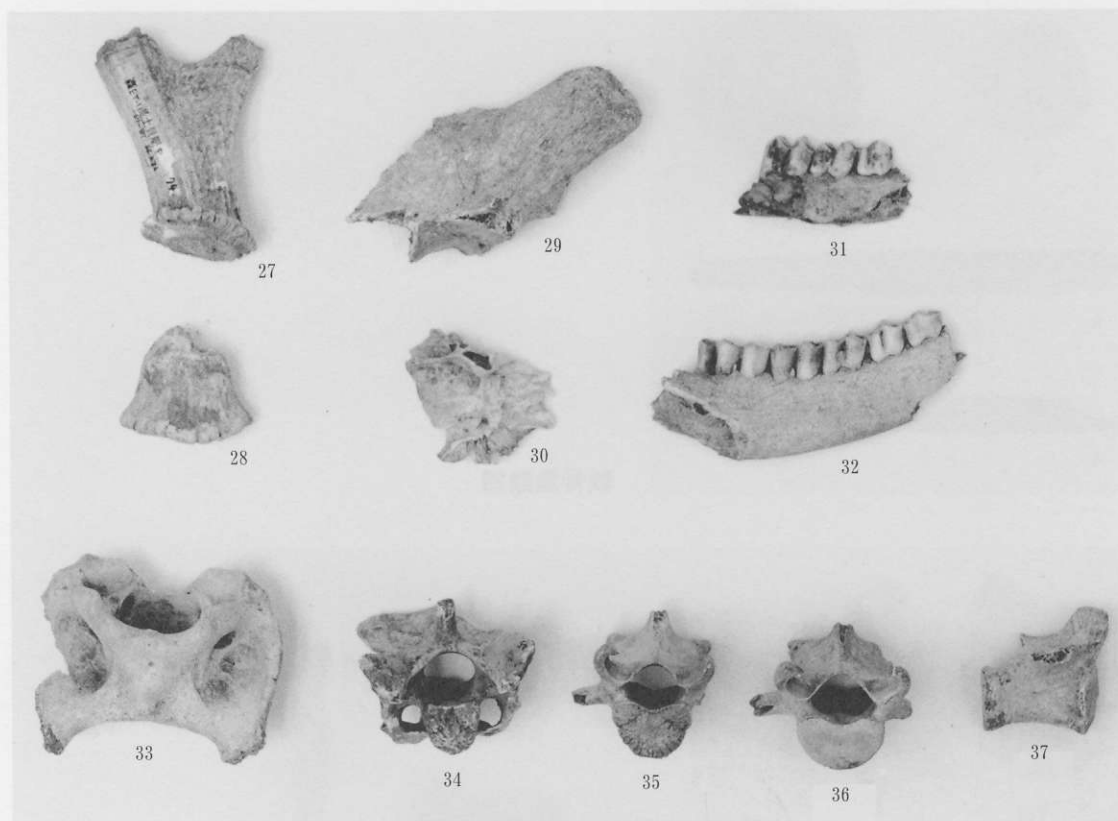
軟骨魚類網



硬骨魚類網



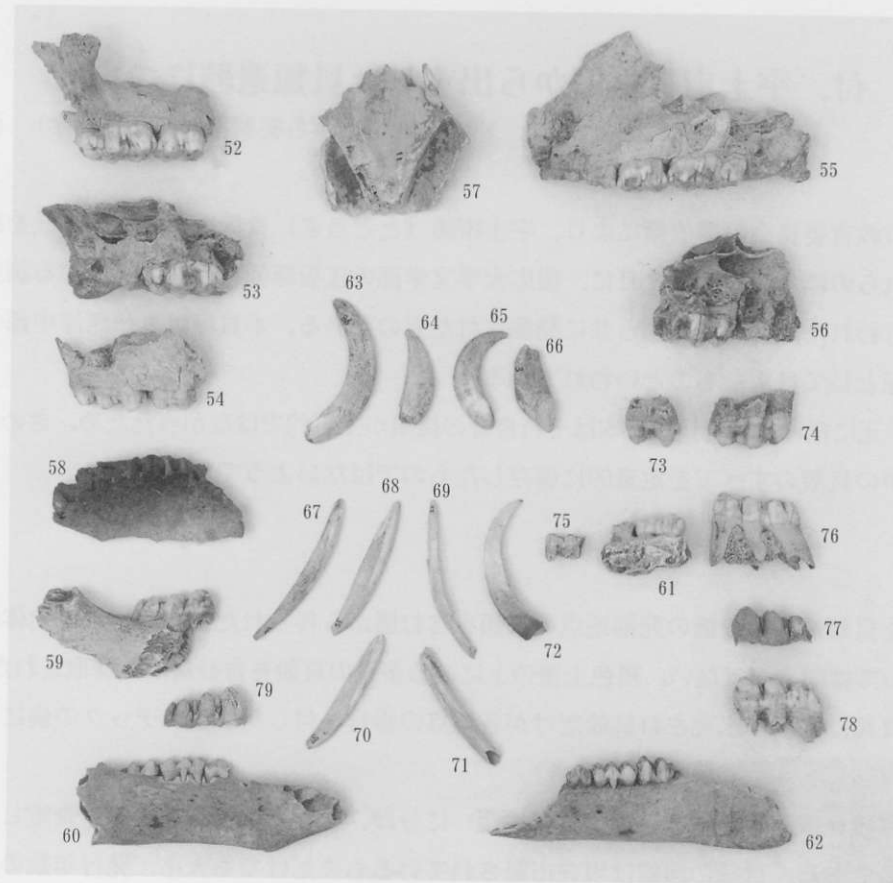
鳥網・哺乳類網



哺乳類網・ニホンジカ 1



哺乳類網・ニホンジカ 2



哺乳類綱・イノシシ 1



哺乳類綱・イノシシ 2

付. 宇土市轟貝塚から出土した貝類遺骸について

九州大学名誉教授 (海洋生物学) 菊池 泰二

この度宇土市教育委員会の御依頼により、宇土市轟 (とどろき) 貝塚出土の貝類遺骸を調査することになった。これらの標本は1966年3月に、慶応大学文学部の江坂輝彌教授を主査とする調査団により考古学的調査が行われた際に人工遺物と共に発掘されたものである。本貝塚は九州西岸中部の海に面した縄文時代の貝塚として貴重なものといわれている。

今回筆者の手元に預けられた貝類標本はそれ自身の採集が主目的ではなかったため、きめられたブロック状の堆積物中の貝殻のすべてを定量的に保存したものではないようである。

結 果

今回預かった貝類遺骸は6箇の発掘地点の貝類を含む層から得られたもので、貝塚全体の広がり、年代的厚みについては明らかでない。褐色土層の上にある多くの貝殻を含む層から採取されたものである。お預かりした貝類はすべて水洗され貝殻だけが各地点の番号を付したプラスチックの袋に収められていた。

貝類はまず二枚貝綱と腹足綱 (いわゆる巻貝類) に分け、各地点試料ごとに種を査定した。結果は一枚の表にまとめてある。貝類の図鑑は現在市販されているものだけでも大小、発行年数の異なるものが幾通りもあるが、目、科といった中間段階の分け方や呼称に色々な食い違いがみられる。今回は最新最大の原色大図鑑、奥谷喬司編著「日本近海産貝類図鑑、1174頁、東海大学出版会刊」にしたがった。

腹足綱 (巻貝) の表の上部にあげられるイシダタミ、スガイは磯の転石地に現在でもごく普通にすむ巻貝、それに続くウミニナ、フトヘナタリ、カワアイは泥干潟を細長い殻をひきずって移動する巻貝である。これらは転石表面の小さい藻類や泥干潟の表面にすむ微細な硅藻類を食物としている。量的にはごく普通にいるが、より大きい貝類が容易に採れるなら特に良質な食物とはいえない。

タマガイ科以下の巻貝類はいずれも肉食性で、アッキガイ科のレイシガイは岩礁地にすみ、細長い吻をさしのべて固着性のフジツボ類や固着性の二枚貝、笠貝類を捕食する。それ以外の肉食性の巻貝は大きな吻をのばして砂泥地にすむ二枚貝やその他の小動物を捕食する。アカニシ、テングニシ、バイなどは成貝は大潮低潮線より深い砂底にすむことが多い。今回の標本で人に食べられたアカニシが直径4~5cmの幼貝が多かったのは、幼貝は大型のカニ類やタコなどに食われ易いため、干潟に生息することが多く、古代人に捕られ易かったのではないかと推測される。

一方、二枚貝はほとんどすべての種が海水中の植物プランクトンを水と共に吸い込み、大きな鰓 (えら) で水を濾し、鰓上に残る植物プランクトンを鰓上の繊毛運動で順送りして自分の消化管に送り込む摂食様式を持っている。

今回の標本の中で個体数が多かったのはハイガイとマガキである。フネガイ科の貝は殻表面に多く肋 (ろく) を持つが、もっとも大型のアカガイは殻の直径が12cm、殻表面の肋数は42本、水深5~50mの内湾砂泥底にすむ。同じく大型のクマサルボウ (今回1箇だけ含まれていた) は殻の直径が8cm前後、水深5~20mの泥底にすむとされる。日本でもっとも多量漁獲されるサルボウガイの場合、殻の直径5.6cm、殻表面の肋数は32本、生息深度は潮下帯上部から水深20mまでの砂泥底、それに対しハイガイは殻

の直径は6.3cm以上、殻表面の肋数は18本、生息深度は潮間帯下部から最深10mまでと書かれている。今回の轟貝塚の出土構成を見ると、フネガイ科の食用貝類では圧倒的にハイガイが多く、クマサルボウが1個あったがサルボウガイは入っていなかった。

もう1種の多数出現した種はイタボガキ科のマガキである。マガキは現代でも有明海、八代海の干潟中部、下部に大小の集合を作りカキ礁を作っているのが見受けられる。古代人にとっても、マガキは収穫し易い海の幸だったのだろう。

もうひとつ現代人にも親しい大型の食用二枚貝にハマグリがある。ハマグリは現在でも有明海の宇土半島側の付け根、緑川、白川の河口干潟で一年物の若い貝がある程度は毎年漁獲されるが、本来は3年、5年以上成長、成熟するまで待って漁獲すべきものである。ハマグリが内湾性であるのに対し、チョウセンハマグリは外海に面した海岸の潮下帯で漁獲されるが、今回の轟貝塚の大型の二枚貝遺骸を見ると、あきらかにチョウセンハマグリと判断できる大型重厚なハマグリが混じっている。

謎の北方大型二枚貝

今回調べた轟貝塚出土の貝類遺骸の生物相の95%は現在もこの地方の海辺で発見できるものである。なぜ縄文文化中期には現在の宇土市沿岸でサルボウガイが貝塚中になくハイガイばかりなのか、なぜ限られた出土サンプルの中にハマグリとチョウセンハマグリが共存するのか、なぜアサリの貝殻がほとんど入っていないのか、などの疑問はあるにしてもそれは有明海、八代海が今よりずっと内陸まで侵入していた数千年前との地形変化、海流、潮流の変化を考えると驚くほどのものとは思えない。

それとまったく異なる説明できない大きな二枚貝の標本が2点、AT14区黒褐色土層上層の貝殻含有層(混土貝層)とAT11区混土貝層というサンプルの中に入っていた。2つの標本は明らかに他の有明海産、八代海産の貝類とは異なった北方系の貝の雰囲気を保っていた。筆者が受け取った時このサンプルには、“中世に攪乱の跡あり”というメモが付けてあった。慶応大学の考古学の研究室から発掘された資料が返却された際、このメモが付けられたのだとすれば、上部から調査地点を掘り下げて混土貝層に達した際異質な大きな貝殻を発見し、後世の攪乱によると判断したのだろうか。

二つの大型二枚貝標本の一つは *Patinopecten jessoensis* ホタテガイに酷似しており、もう一つは *Pseudocardium sachaliense* ウバガイ(パカガイ科)のように見えた。ホタテガイは日本の東北地方の日本海からオホーツク海にかけて生息し、現在は東北日本の各地で盛んに養殖されている。養殖に適した水深は10m~30mだという。一方ウバガイは図鑑のカラー写真と比較してみてもウバガイの特色ある厚いからは殻頂近くまで膨らみ、前後の側歯が強大であるとてもよく一致する。現代のウバガイの地理的分布は、太平洋岸では鹿島灘以北、日本海北部、沿海州、サハリン、南千島、オホーツク海、潮間帯下部~水深30mまでの砂底とされている。少なくとも日本海では北陸地方沿岸以南の記録はないようである。

今年3月中旬に会議のため上京の機会があり、「日本近海産貝類図鑑」の編著者であり現在日本貝類学会会長でもある畏友奥谷喬司博士の所へ問題の2箇の大型二枚貝標本を持参して鑑定を依頼した。筆者の査定の根拠としたホタテガイとウバガイではないかという主張については、属レベルではおそらく誤りはないと思うし、縄文期は地球が温暖化した時期で、それ以後北方系の沿岸性の海産動物が南下する機会があったとも思えないという主張も理解できる。しかし、問題はこの標本が縄文時代の物ではないとして、それ以降の時代のものか、それ以前の時代の生物で化石化したものではないと言い切れるだ

ろうか。このホタテガイに酷似した貝は割れかけた状態のままつながっているが、掌上での触感からすると現生のホタテガイより比重が大きいような気がする。いずれにしても考古学者の発掘のポイントはその直前に決められるものであろうし、過去のある時代に北方系の貝を埋めた人物があったとしてもそれ以上の追跡は不可能としておくしかないだろうとの御意見で、筆者も同意した。

表 1 轟貝塚出土貝類

				調査地点 基本層序※	AT14 II ¹⁾	DT9 III ²⁾	DT20 III ³⁾	DT22 IV ⁴⁾	ET2 III ⁵⁾	AT11 II ⁶⁾
網 (亜網)	目	科	種名 (標準和名、学名)	資料No. 1	資料No. 2	資料No. 3	資料No. 4	資料No. 5	資料No. 6	
腹足網 (前鰐亜網)	古腹足目	ニシキウズガイ科	イシダタミ <i>Monodonta labio form confusa</i>	3			3			
		サザエ科	スガイ <i>Turbo (Lunella) cornatus coreensis</i>	1		1				
	盤足目	ウミニナ科	ウミニナ <i>Batillaria multiformis</i>	3				1		
		フトヘタナリ科	フトヘタナリ <i>Cerithidea (cerithidea) rhizophoramum</i>					2		
			カワアイ <i>Cerithidea (Cerithideopsilla) djadjariensis</i>	3					3	
		タマガイ科	ツメタガイ <i>Glossaulax didyma</i>			1		1		
			ゴマフダマ <i>Natica tigrina</i>	1						
	新腹足目	アツキガイ科	レイシガイ <i>Thais (Reishia) bronni</i>	1					2 (成)	
			アカニシ <i>Rapana venosa</i>		1 (幼)	1 (中)、 1 (幼)	1 (大)、 3 (幼)		3 (幼)	
		テングニシ科	テングニシ <i>Hemifusus tuba</i>						1 (中)	
		エゾバイ科	バイ <i>Babylonia japonica</i>				1 (成)			
ミガキボラ <i>Kelletia lischkei</i>						1 (成)				
二枚貝網										
翼形亜網	フネガイ目	フネガイ科	クマサルボウ <i>Scapharca globosa ursus</i>	1 (大)						
			ハイガイ <i>Tegillarca granosa</i>	2 (中)	6 (大)、 7 (中)	右2、左 3 (大)	1 (大)、 2 (中)	1 (大)、 2 (小)		
	カキ目	イタヤガイ科	アズマニシキ <i>Chlamys (Azumapecten) farreri nipponensis</i> <i>Patinopecten</i> sp. ホタテガイ近縁種	1 (大)						
		イタボガキ科	マガキ <i>Crassostrea gigas</i>	1 (大)、2 (中)、 4 (小)	4	1 (大)、2 (小)、 1 (破片)	4 (小)	6	3 (大)、 4 (小)	
異歯亜網	マルスダレガイ目	バカガイ科	ウバガイ (?) <i>Pseudocardium sachalinense</i> (?)							1 (大)
		シジミ科	ヤマトシジミ (河口汽水種) <i>Corbicula japonica</i>				1 (双)、 1 (破片)			
		マルスダレガイ科	アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i>	1			1		1	
			ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>	右2 (大)、左 2 (中・大)						
			チョウセンハマグリ <i>Meretrix lamarckii</i>	左1 (大)						
			オキシジミ <i>Cyclina sinensis</i>	1	2 (双)、 左1		2	2	2	
			カガミガイ <i>Phacosoma japonicum</i>			3 (大)				
		オオノガイ目	オオノガイ科	オオノガイ <i>Mya arenaria oonogai</i>			1 (大、破 損)		1 (中、破 損)	

註

- 1) 黒褐色土層上層の貝殻含有層 (混土貝層)
- 2) 純貝層
- 3) 純貝層
- 4) 褐色土層上層
- 5) 純貝層
- 6) 混土貝層 (中世の攪乱あり)

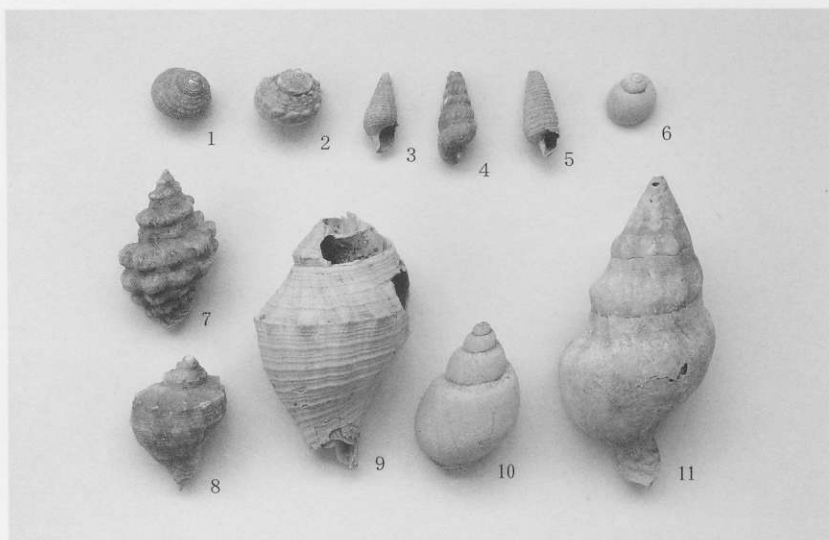
※基本層序

AT~DT

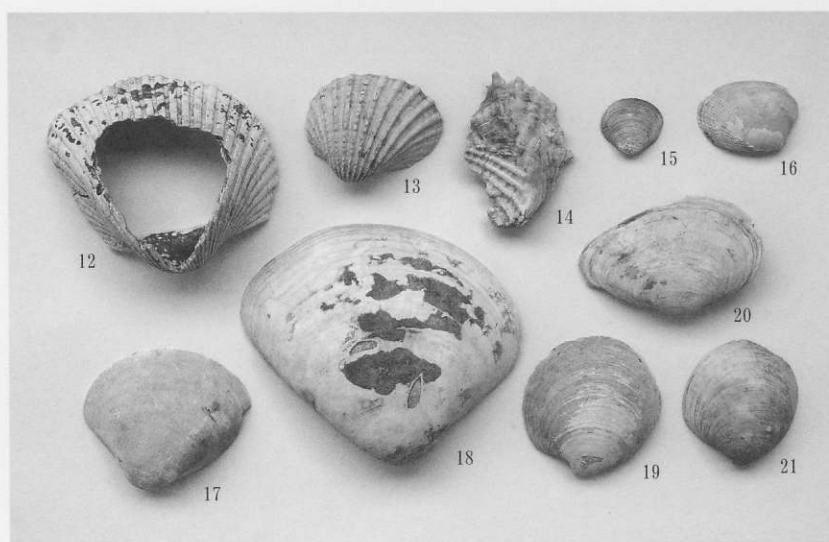
- I 表土・攪乱層
- II 黒・褐色混土貝層・混土貝層
- III 純貝層
- IV 褐色土層
- V 黒色土層

ET

- I 表土・攪乱層
- II 黒褐色混土貝層
- III 純貝層
- IV 暗褐色混土貝層
- V 暗褐色混土貝層



腹足綱（前鰓亜綱）



二枚貝綱 1



二枚貝綱 2

- 1 イシダタミ 2 スガイ 3 ウミニナ 4 フトヘタナリ 5 カワイ 6 ゴマフダマ 7 レイシガイ 8 アカニシ 9 テングニシ
10 バイ 11 ミガキボラ 12 クマサルボウ 13 ハイガイ 14 マガキ 15 ヤマトシジミ 16 アサリ 17 ハマグリ 18 チョウセンハマグリ
19 オキシジミ 20 オオノガイ 21 カガミガイ 22 ウバガイ 23 アズマニシキ

第9章 総 括

第1節 轟貝塚出土の縄文土器について

本調査出土の縄文土器は早期から後期にまでおよぶ。本節ではこれらの縄文土器について概観したい。

早期の土器は押型文系土器群（Ⅰ類）や塞ノ神式の貝殻文系土器群（Ⅱ類）であり、本貝塚において最も古く位置づけられ、早期にはすでに周辺に縄文時代人が生活していたことがわかる。ただし、当該時期の土器の出土数は比較的少ない。

続く前期の土器として、轟式系土器群（Ⅲ類）が数多く出土した。本土器群に属する土器はかなりのバリエーションがあり、轟A式（Ⅲa類）、同B式（Ⅲb類）、同C式（Ⅲc類）、同D式（Ⅲd類）、野口式（Ⅲe類）、曾畑式（Ⅲf類）、尾田式（Ⅲg類）などで、各形式のほとんどで細分できる。

特に轟B式土器についてはⅢb1～Ⅲb6類に分類され、隆起文が高く突出するもの（Ⅲb2類）や細く低いもの（Ⅲb1・Ⅲb4類）、粘土紐を貼り付けずに器表面の摘み上げで微隆起文を施すもの（Ⅲb6類）、隆起文上に刺突文や刻み目を施すもの（Ⅲb5類）など、隆起帯文のみに着目しても様々な施文パターンが存在する。また、Ⅲb2類土器のなかには、内外の器壁に強い貝殻条痕を施す轟A式のうち、曲線状の文様や一定方向の規則的な条痕を施すⅢa2類と器面調整法が酷似するものがある。

また、野口式に相当するⅢe類のうちⅢe1類は、隆起帯文と波状文などを細い沈線で施文する野口・阿多タイプの土器で、轟B式や曾畑式との関連が指摘できる。なお、曾畑式は出土数が極端に少なく、1958年の第5次調査報告でも「純粋な曾畑式は出ず、表面採集の中にもなかった」と記しており（松本・富樫1961）、その要因については今後の検討課題である。

Ⅳ類の阿高式系土器群については、並木式（Ⅳa類）、阿高式（Ⅳb類）、南福寺式（Ⅳc類）、出水式（Ⅳd類）などが出土しており、底面に鯨脊椎骨痕や木葉痕が残る土器は本類に相当する。なかでも阿高式がⅣ類の主体を占めるが、阿高式でも新しい段階の特徴とされる、文様帯が口縁部に限られ、口縁部が胴部にくらべて肥厚するⅣb2類が割合的には多く出土している。

阿高式系土器群に後出する市来式系（貝殻条痕文系）土器群（Ⅴ類）、磨消縄文系土器群（Ⅵ類）、黒色磨研土器群（Ⅶ類）などの後期の土器は、Eトレンチで主体的に出土している。このうち磨消縄文系土器群の鐘崎式（Ⅵa類）や北久根山式（Ⅵb類）では赤色顔料が付着しているものが多いが、これはEトレンチで検出された後期前半とされる埋葬人骨との関連が想定される。

第2節 轟貝塚の形成過程について

A～DトレンチとEトレンチの層序は、道路を挟んで比較的近接しているにもかかわらず、層序が異なっており、いずれも純貝層が検出されている。

A～Dトレンチ周辺のプライマリーな堆積状況を示すとみられる地点の層序は、基盤層直上に黒色土層が形成され、その上位に褐色土層が堆積しており、両層からは轟式系土器群が数多く出土している。その上層である純貝層では阿高式系土器群が出土し、下層の黒色土層や褐色土層では皆無といってよい状況から、出土資料をみる限り阿高式系土器群の段階に純貝層が形成されたと想定される¹⁾。5次調査でも松本雅明氏は「阿高式土器と轟式土器の間には明確に層位的区分がみとめられる」としている（松本・富樫1961）。純貝層上層の混土貝層及び混貝土層では、弥生から中世までの幅広い時期の遺物が

出土している。埴輪の出土から古墳が築かれていたことや、中世居館に伴うとみられる横堀跡の存在などから、後世の改変がかなりの範囲におよんでいたとみられる。また、Eトレンチ検出の純貝層は、市来式などの貝殻条痕文系土器群や北久根山式、鐘崎式などの磨消縄文系土器群が出土する後期の貝層と考えられ、A～Dトレンチ検出の貝層と形成時期が異なる。

これらを総合すると、縄文時代早・前期段階では集落は既に存在していたといえるが、中期の阿高系土器群の段階に貝塚が形成され、続く磨消縄文系土器群の時期である後期にも貝塚西側に貝層が形成された可能性を指摘できよう。ただし、第5次調査では轟式土器を単純に包含する貝層が報告されており²⁾、前期の貝層が存在する可能性も考慮すべきであろう。

また、Aトレンチでは人骨が近接して検出されているが、本地点周辺の第1～3次調査で人骨が多数確認された（鈴木1917・1918、濱田・榊原1920、清野1920）。これらの調査成果より、轟貝塚が位置する低台地東側は前・中期にかけての墓域とみられる。なお、縄文時代の居住域は未確認であるが、現在住宅が密集している貝塚西側の標高がやや高い地点（標高8m前後）がその候補地にあげられる。

轟貝塚に隣接する西岡台貝塚では、貝層が2つに大別され、下層が轟・曾畑式などの前期の土器を主体とするが、阿高式や船元式など中期の土器もこの層に含まれる。また、上層は出水式や北久根山式、御手洗式などの後期前半の土器を主体とする（木下・高木ほか1985）。下層の貝塚が轟貝塚の阿高系土器群が出土する貝塚、上層が貝殻条痕文系土器群や磨消縄文系土器群が出土した後期の貝塚におおむね対応するかのような状況を呈するのは興味深い。しかし、両貝塚とも調査面積が限られていることや、西岡台貝塚で行われた貝種の分析は轟貝塚では行われていないことから、両者の関係については、出土した土器や貝塚の形成過程を含めた詳細な検討が必要であり、今後の課題としておきたい。

註

- 1) 慶応大学資料を実見した池田朋生氏も轟貝塚が中期に形成された可能性を指摘している（池田2002）。
- 2) 第5次調査で最も原初の状態をとどめるとされるI tの一部（Dトレンチに近接）で、第1層は耕作土、第2層は阿高式のみが出土するカキを主体とする純貝層、第3層は混土貝層、第4層はハイガイを主体とする貝層、第5層は純黒土層の計5層に分層され、第3層以下では阿高式は出土していないとされている（松本・富樫1961）。6次調査との対応でみれば、5次第2層が6次純貝層、5次第5層が6次黒色土層にそれぞれ対応するとみられるが、表土層を除いてそれ以外で対応する土層は明確ではない。また、6次調査において江坂氏も阿高式の時期の純貝層下の一部に轟式後半のハイガイの多い薄い貝層があるとしている（江坂1971）。

引用・参考文献

- 池田朋生 2002「轟貝塚」『新宇土市史』資料編第2巻 宇土市
- 江坂輝彌 1971「熊本県宇土市轟貝塚」『日本考古学年報』第19号 日本考古学協会
- 木下洋介・高木恭二ほか 1985『西岡台貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集 宇土市教育委員会
- 清野謙次 1920「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第5冊
- 鈴木文太郎 1917「河内国府人骨・肥後轟貝塚にて発掘せる人骨について報じ併せて石器時代の住民に及ぶ」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第2冊
- 鈴木文太郎 1918「肥後轟貝塚河内道明寺等にて発掘せる人骨に就いて」『人類学雑誌』第33巻第3号
- 濱田耕作・榊原政職 1920「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第5冊
- 松本雅明・富樫卯三郎 1961「轟式土器の編年—熊本県宇土市轟貝塚調査報告—」『考古学雑誌』第47巻第3号 日本考古学会